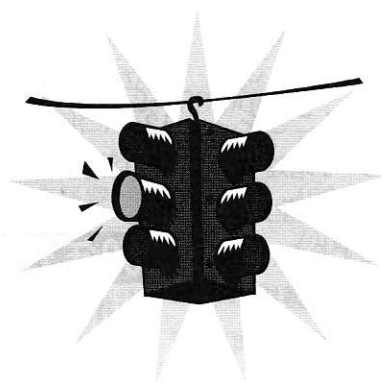


■おきなわ環境ネット■

沖縄環境ネットワーク通信 26 号

*The signal of Okinawa
is always yellow blink..*



-
- | | |
|---------------------------|----------|
| 辺野古ボーリング調査の阻止と環境影響評価「方法書」 | … 真喜志 好一 |
| 普天間代替基地アセス方法書の問題点を問う | … 編集部 |
| 新石垣空港環境影響評価「準備書」が公告縦覧される | … 内海 正三 |
| ゴミ処分場建設計画撤回、その後… | … 大城 順子 |
| アメリカが去り ニホンがやってくる | … 仲西 美佐子 |
| コスタリカツアー日誌 (第2回) | … 内海 正三 |

2004年度総会資料

《環境情報おきなわ》

■沖縄県名護市の東海岸・辺野古（へのこ）地区。いわずと知れた普天間代替基地の建設予定地である。いま、辺野古が緊迫の度合いを強めている。建設のための予備調査とも言えるボーリング調査を、那覇防衛施設局が強行しようとしているからだ。

これに対抗する地元住民やこれを支援する市民たちが、4月半ばから、現地で抗議の座り込みをはじめた。それから2ヶ月近く。座り込みの数は一向に減らず、激励に訪れる人も県内外から絶えることがない。おりしもその最中、基地建設のための「方法書」が縦覧開始された。

この方法書の問題点の指摘とともに、最近も動きも交えて、辺野古の状況をレポートする。■

辺野古・ボーリング調査の阻止と環境影響評価「方法書」

真喜志 好一（沖縄環境ネットワーク世話人）

那覇防衛施設局が、護岸構造検討のための「現地調査」と称してボーリングによる地質調査を行おうとしている。

この調査は、「環境アセス法」に違反していることを私たちはかねてから指摘してきた。護岸を3〜4階建てのアパートのようなサイズの巨大コンクリートの箱型にするか、テトラポットなどを置いた傾斜型にするか、という護岸構造の検討に地質調査は必要ではない。護岸の前面の海の深さと、護岸に当たる波の高さが分かればよい。これは土木工学の教科書に書かれていることである。

それなのにガリガリゴリゴリと海底の岩を削り、カンカンと叩き込んで硬さを調べるボーリング調査。それを63箇所も行うという。その本当の目的は何なのか。環境アセスを行う前にジュゴンを寄り付かないようにするためではないか、と疑問をぶつけても当局による弁明も説明もない。

4月19日未明5時30分という非常識な時間に、多数の那覇防衛施設局職員、仮設ヤード設営業者、調査業者らが強行に調査に着手し、クレーン車でヤードを設営しようとしたことは多くのメディアに報じられた。今日に至るまで説明責任を果たさないまま、断続的に調査に現れ、辺野古の人々に追い返されている。

4月28日、連休を前に454ページもの環境アセス「方法書」が縦覧された。始業時に「コピーしたいので一日だけ、貸してください」と依頼したが、「閲覧場所で閲覧し、書き写すように」との対応。仕方なく「情報開示請求」を行う一方で、頁をめくった。

方法書では1996年12月のSACO合意から、1999年の稲嶺恵一沖縄県知事の「キャンプ・シュワブ水域内辺野古沿岸域」に決定した旨の表明に事実経過が飛んでいる。方法書の「対象事業の目的」から欠落している事実経過をマスコミ報道も引用しながら示す。

第一の事実。1966年1月に、米海兵隊が辺野古沿岸の埋立飛行場計画を立てた。この飛行場に加えて、その年12月に海軍が大浦湾に軍港を作る計画をたてた。

（沖縄タイムス 2001年6月3日・朝刊）



第二の事実。SACO 合意のあと、名護市民投票が行われた。その際に、沖縄駐留の自衛官ら5500人に「賛成票獲得に協力を」との異例の文書要請を防衛庁長官が行った。（沖縄タイムス 1997年11月28日）



第三の事実。那覇防衛施設局が、職員総数460名の中から200名もの職員を名護市内におよそ一週間も宿泊さ

せ、振興策のパンフを配布し、「基地」に協力を訴える「ローラー作戦」を行ったこと。

(琉球新報 1997 年 12 月 9 日夕刊)



この第二、第三の事実、日本政府が住民自治に直接に介入した事実として忘れてはいけないだろう。

第四の事実。以上のような名護市民自治への政府の介入にも関わらず、1997 年 12 月 21 日、名護市民は市民投票で「海上基地建設に反対」の民意を示した。

市民投票の民意に立ち返ろう

政府自らが介入したにもかかわらず、市民投票で示された「海上基地建設に反対」という民意が思い起こされることを恐れて方法書に記載しなかったのだろう。

ボーリング調査の強行に法的な根拠はない。辺野古住民を中心にした炎天下での座り込みが辺野古漁港の入り口で続いている。その市民的不服従運動によって国、那覇防衛施設局は進む道をふさがれている。国がたどるべき正しい道は辺野古海上基地計画を 97 年の市民投票の民意に従うことだ。

2003 年 3 月に開いた国際ワークショップ「軍事活動と環境」での出会いがきっかけになって、ジュゴンほか 6 団体と 3 個人を原告、ラムズフェルド等を被告にした米国での裁判を起こした。6 月末に沖縄で、「国際サンゴ礁シンポジウム」が開かれる。そこに裁判を支えている米国のメンバーら 6 名が参加して、辺野古のサンゴ礁とジュゴンの保護を訴えることになっている。報告集もある。詳細は環境ネットワーク事務局にお問い合わせを。

辺野古の座り込み日誌は下記の URL で読めます。

<http://diary5.cgiboy.com/2/henokonikki/>

2004 年度環境アセスメント学会総会 研究発表会のお知らせ

開発ラッシュの沖縄では、環境アセスメントが機能しているのかどうか問われる事態が頻発しています。そこで、2004 年度の環境アセスメント学会総会・研究発表会が沖縄で開かれることになりました。環境アセスメントの危機を克服する道を、現場からさぐるためです。沖縄でアセスメントが適正に機能していない状況を全国に情報発信する絶好の機会です。非会員にも公開されていますので、ぜひご参加下さい。

開催日：2004 年 10 月 16 日（土）～18 日（月）

開催地：沖縄大学（沖縄県那覇市国場 555）

大会委員長：桜井国俊（沖縄大学学長）

プログラム：

- ・総会
- ・研究発表会（自然環境・予測評価技術・社会影響・合意形成・国際関係などのテーマについて）
- ・シンポジウム（2 つのテーマを予定）
- ・現地視察ツアー（18 日に泡瀬・辺野古を視察予定／詳細未定）

シンポジウム 1（16 日午後に開催）

「沖縄の開発と環境アセスメント」

シンポジウム 2（17 日午後に開催）

「廃棄プロジェクトのアセス」（原発、ダム、焼却炉などを取り壊すプロジェクトの環境アセスメント）

学会参加費（シンポジウムを含む）は正会員 4 千円、非会員 6 千円、非会員学生 4 千円と割高なため、シンポジウムだけの一般公開も行い、1 シンポジウム 500 円～1000 円の入場料とする予定です。

普天間代替基地アセス方法書 の問題点を問う

編集部

去る4月28日、那覇防衛施設局は、米軍普天間飛行場代替基地施設の建設に伴う環境影響評価（アセスメント）の方法書の公告縦覧を開始した。440ページに及ぶこの方法書の内容については、縦覧直後から数多くの不備が指摘され、疑問の声が日に日に大きくなっている。折りしもこの縦覧開始直前、施設局は代替基地建設のためのボーリング調査を開始した（実際には住民の抗議で延期されている）。このタイミングで出された方法書の問題点を広く市民と議論し合うことを目的に5月14日、「環境学からみたアセス方法書」と題した緊急講演会が沖縄大学で開催された。

ここでは、この日の報告と議論を基に、今回の方法書の問題点と課題を取り上げてみたい。

方法書とはなにか

今回縦覧されている方法書とは、「事業者（那覇防衛施設局）が対象事業（普天間飛行場代替基地建設）に係わる環境影響評価を行う方法（調査、予測および調査に係わるものに限る）について、主務省令（防衛庁が行う飛行場及びその施設の設置又は変更の事業に係わる環境影響評価の項目並びに当該項目に係わる調査、予測及び評価を合理的に行うための手法を選定するための指針、環境の保全のための措置に関する指針等を定める内閣府令）で定める4項目を記載した文書のことを言う。

その4項目とは以下の通りである。

- ・ 事業者の氏名および住所
- ・ 対象事業の目的及び内容
- ・ 対象事業が実施されるべき区域
- ・ 対象事業に係る環境影響評価の項目並びに調査、予測及び調査の方法

このように、文字通り「環境影響評価のための方法」について書かれたものであり、この方法書及び意見に基づき事業者が調査、予測及び評価を行い、その結果を環境の保全のための措置及び事後調査の計画とともに記載したものが「準備書」と呼ばれる。さらに準備書についての意見により、必要に応じて事業者が修正を加え、意見についての見解を記載したものが「評価書」である。この評価書が承認されてはじめて、当該

事業が着工できるわけである。（環境影響評価手続きの流れの図を参照）

さて、今回の方法書を読む上で、次の8つの点がポイントとして挙げられる。

- ①検討範囲は絞り込まれているか
- ②方法書の公告・縦覧は適切に行われたか
- ③対象事業の必要性が明示されているか
- ④対象事業の内容（事業特性）が予測の前提となる程度にはっきりしているか
- ⑤アセスの対象とすべきものが外れていないか
- ⑥対象実施事業区域の守るべき環境の特質（地域特性）がきちんと把握されているか
- ⑦調査、予測および評価の方法が適切か
- ⑧代替案の検討が含まれているか

これらについて一点ずつ検証してみる。

①検討範囲は絞り込まれているか

準備書は400頁を超える膨大なもので、これだけとっても絞り込まれているとは到底言えない。それに対して、「予測結果をどう評価するか」という重要な部分についてはたった3分の1頁しか書かれておらず、しかも前述の内閣府令のマニュアルをコピーしただけという内容のないものである。

②方法書の公告・縦覧は適切に行われたか

防衛施設局の姿勢は「縦覧は書き写しが原則。貸し出しを希望なら情報公開請求をしてほしい」というもの。しかし、400ページを超える方法書をその場で書き写すのは事実上不可能であり、関係者に見てもらい情報を収集しようという発想が極めて希薄である。また関心がある人が県外にも大勢いるのに、沖縄県内だけの縦覧しかできないことにも問題がある。元の住民や専門家の意見に耳を傾け、知恵を活用しようという姿勢はゼロとしか思えない。

③対象事業の必要性が明示されているか

「対象事業の目的」という項目では、97年暮れの名護市民投票については一言も触れず、また米軍戦略の変化にもコメントはなく、基地移設の必要性が示されているとはいえない。

また、今回の計画は「官民共用空港」とされているが、

民間部分の旅客・貨物需要見通しは那覇空港のものから始まって大変に甘く、これで民間機が就航するとはとても思えない。「北部の民間空港」として地域の財産ではなく負担になる恐れが強い。

④対象事業の内容（事業特性）が予測の前提となる程度にははっきりしているか

軍用機の機種・飛行ルート・飛行回数・飛行時間帯など、航空機騒音の検討のための基本情報が示されていない。また、埋立地の上に建設されるターミナルビル、管制塔、駐機場、格納庫、整備工場、弾薬庫、弾薬装填場などの施設の記述が全くない。計画では埋め立てに要する土は 1770 万 m³ という膨大な量となるが、これをどこから採ってくるかも特定されていず、これがアセスの対象に含まれるかが不明である。

⑤アセスの対象とすべきものが外れていないか

埋立地には護岸が欠かせず、両者は一体のものである。護岸工法の検討と称して、今回那覇防衛施設局が強行しようとしている 63 本の海底ボーリング調査を、アセスの対象外としているのはおかしい。

方法書では、護岸は対象事業の一部とされている。アセスは対象事業による環境影響を論ずるものであり、海底海底ボーリング調査は護岸建設のための地質調査であり、対象事業の一部である。従って当然アセスの対象とすべきである。

⑥対象実施事業区域の守るべき環境の特質（地域特性）がきちんと把握されているか

建設予定地の辺野古沿岸域は、沖縄県の「自然環境の保全に関する指針」で「評価ランク 1」（厳正な保護を図る地域）に分類されており、この点は方法書にも記載されている。「厳正な保護を図る」という沖縄県の方針とこの事業の整合性はどうか。

⑦調査、予測および評価の方法が適切か

方法書では、予測の基本的な手法を「生息環境の改変の程度を踏まえ、類似の事例や既存の知見等を参考に、対象事業の実施等がジュゴンに及ぼす影響を定性的に予測する」としているが、この「類似の事例」は示されていない。現状ですら絶滅の危機に瀕している北限のジュゴンが、この事業によって曝されようとしている事態と類似の事例がどこにあるのか、具体的に示すべきである。

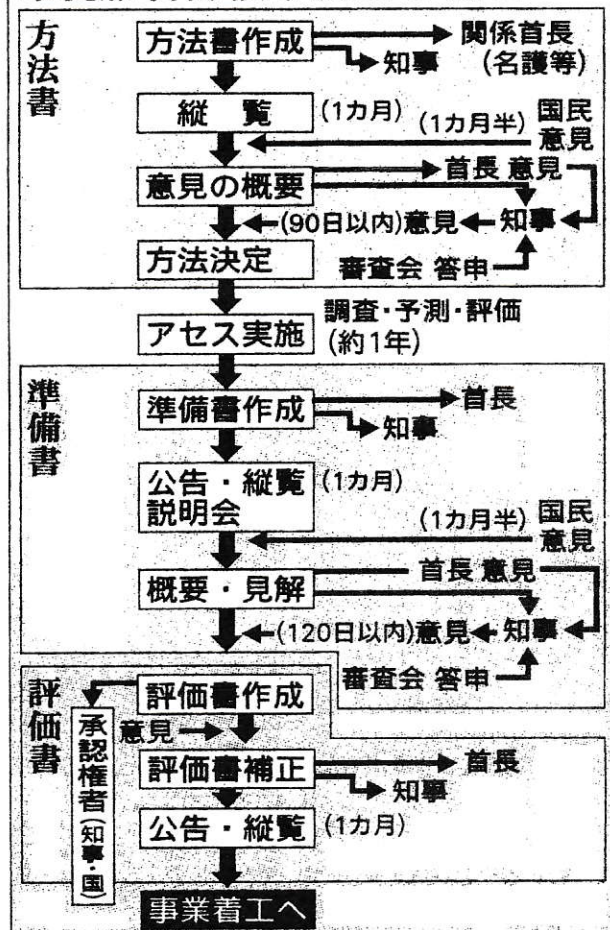
⑧代替案の検討が含まれているか

方法書には代替案（建設地点その他）は含まれていない。なぜ自然環境に優れる辺野古沿岸域が適地なのか、代替案を比較して検証すべきである。

以上のように、全般に杜撰な印象を禁じえないこの方法書に関しては縦覧開始当初から問題点を指摘する意見が相次ぎ、新聞紙上を賑わせた。

「移設」という名の基地を再編強化であることが明白なこの計画は、私たちの後の世代に対する膨大なツケである。私たちが子供や孫に対する説明責任を全うするためにも、この杜撰な方法書の改善を強く求めているかなくはないだろう。

環境影響評価手続きの流れ



ニュース
公告・縦覧 事業が環境に及ぼす影響について、事業者は調査方法などを記した「方法書」を作成し、国民が縦覧できるように1カ月間の縦覧期間を設けている。同期間を含む1カ月半は、国民は誰でも意見を出すことができる。知事は当該首長の意見を聞いた上で意見を出し、方法書が確定する。

新石垣空港環境影響評価準備書が公告縦覧される

内海正三（沖縄環境ネットワーク世話人）

新石垣空港整備に係る環境影響評価準備書が3月末に公告縦覧に付され、5月14日まで意見書を受け付けた。その準備書の内容について検討する。

まず、環境影響評価法の準備書では代替案の比較検討が不可欠であるが、その記述が無い。

環境影響評価法には主務大臣が定めるべき指針に関する基本的事項がある。その第二の五の調査、予測及び評価の手法の選定に関する事項の(3)のAに環境影響の回避・低減に係る評価で準備書段階での代替案の比較検討の必要が明確に記されている。

その全文を記すと

(3) ア 環境影響の回避・低減に係る評価

建造物の構造・配置の在り方、環境保全設備、工事の方法等を含む幅広い環境保全対策を対象として、複数の案を時系列に沿って若しくは並行的に比較検討すること、実行可能なより良い技術が取り入れられているか否かについて検討すること等の方法により、対象事業の実施により選定項目に係る環境要素に及ぶおそれのある影響が、回避され、又は低減されているものであるか否かについて評価されるものとする。なおこれらの評価は、事業者により実行可能な範囲内で行われるものとする。

この前半の「建造物の構造・配置の在り方、環境保全設備、工事の方法等を含む幅広い環境保全対策を対象として、複数の案を時系列に沿って若しくは並行的に比較検討すること、」が代替案の記述である。

後半の「実行可能なより良い技術が取り入れられているか否かについて検討すること等の方法により、対象事業の実施により選定項目に係る環境要素に及ぶおそれのある影響が、回避され、又は低減されているものであるか否かについて評価されるものとする」は、評価項目の調査、予測及び評価の手法の選定に係る規定である。

「建造物の構造・配置の在り方、環境保全設備、工事の方法等を含む幅広い環境保全対策を対象として、複数の案を時系列に沿って若しくは並行的に比較検討すること」との法の趣旨は、幅広い環境保全対策を対象として、と有るように環境配慮の実が表れる方法を要求している。

今回の準備書は、「実行可能なより良い技術が取り入れられているか否かについて検討すること等の方法によ

り、対象事業の実施により選定項目に係る環境要素に及ぶおそれのある影響が、回避され、又は低減されているものであるか否かについて評価されるものとする」とある個別の調査項目の選定と調査、予測及び評価に係る部分がその大部を占め、前段に要求している代替案の比較検討は無い。

もし沖縄県が準備書の第5章環境影響評価の項目並びに調査、予測及び評価の手法と第6章調査結果の概要並びに予測及び評価の結果と第7章環境保全措置で代替案の代替をさせるつもりなら、「複数の案を時系列に沿って若しくは並行的に比較検討すること」という「基本的事項」の要請を無視したことになる。

準備書の根幹は代替案の比較検討である。調査項目をいくら沢山並べてもそれは代替案ではない。できるならば、アメリカのようにノーアクション案や現在の施設の拡張案等、7つも8つもの代替案が比較検討されるのが望ましい。環境影響評価法の解説書や参考書には、多くの代替案の実例がある。学ぶ姿勢があれば、今回のような代替案なしの準備書が公告縦覧されなかった筈である。代替案の比較検討に対する住民・NGO・専門家・地方公共団体の意見書は、準備書に対してしか出す機会がない。評価書では公告縦覧されても意見書は提出できないのである。

ここまで環境影響評価法の精神を逸脱した行政行為が行われる事に恐怖すら感じる。

方法書や準備書を通じて情報を市民に公開し、専門家やNGO等の知識を得て、より良い計画に練り上げていく道筋が環境影響評価法であるならば、それは住民との信頼の構築であり、意思疎通の積み上げでなければならない。環境影響評価法が制定される以前の感覚で、手続きだけ進めようとするから、このような法の趣旨を無視した書類になる。

方法書への意見書の無視

(現空港拡張案を代替案に検討せよ)

環境影響評価法は、住民とのコミュニケーションの手段である。方法書を公告縦覧し、広く住民、専門家、NGO、監督官庁の意見・情報を得て、早期の環境配慮を要求している。事業者が、方法書に対する意見書を無視したり、準備書で何の進展もない説明を繰り返すことは、環境影響評価法を骨抜きにするものである。

新石垣空港整備事業に係る環境影響評価方法書に対して、白保のアオサンゴ群落が直近の陸上部での工事で、壊滅的な打撃を受けることを心配する意見書が、広く日本全国から寄せられている。

多くの意見書には、代替案として現空港拡張案が提示されていたが、今回の準備書には代替案すらない。

現空港拡張案を排除した理由として、事業者である沖縄県は、4-18の事業者の見解で「環境影響評価法は環境保全措置についての比較検討することを義務づけておりますが、事業実施区域についての比較検討は義務づけしておらず、地元合意の得られたカラ岳陸上地区で環境影響評価を実施しております。」と述べている。

代替案は、環境配慮の総合評価のために行なうもので、事業の内容によってその代替案は異なる。当然、課題となっている要素について最も適切な代替案を検討すべきである。条文に事業実施区域の代替という文言がないからと、実施区域の比較検討を要求していないとする沖縄県の態度は、環境影響評価法の趣旨を曲解している。

基本的事項に事業実施区域の代替案を明文化しなかったことは、当然である。もし代替案に事業実施区域という文言を入れればどうなるであろうか。全国の発電所や廃棄物最終処理場の設置に、過疎地や手付かずの自然が残されている場所が狙われ、迷惑施設を街中から遠くに排除すれば事足りるとする風潮を助長することになる。欠陥施設であっても、その改善案ではなく、欠陥施設のまま場所さえ変えれば要件を満たすことになる。それでは今までの自然破壊型の開発行政と変わらなくなるからである。それゆえに基本的事項に事業実施区域の比較検討という文言が入っていないのである。

環境配慮を求められる一番大事な要素・項目に対してその代替案を提示することが環境影響評価法の主旨である。重大でもなく、住民専門家からも要求されていない枝葉末梢の比較検討を環境影響評価法が求めているのではない。開発による環境影響をいかに回避・低減したかということである。新石垣空港建設においては、白保のアオサンゴ群落の保全に問題が多いので、IUCN総会の二度の決議がなされ、それを受けて場所の変更が行われたのである。再び白保地区に予定地を設定したなら、他の場所、特に最も環境負荷の少ない現空港との対比は不可欠である。

問われている内容に適合した代替案が要求されており、法文に事業実施区域という文言が無いから行わないとする沖縄県の態度は、基本的に環境配慮をする意欲が無く、アリバイ的に手続を進めていると言われても否定できないであろう。

それにしても代替案すら提示しないのは事業者としての職務怠慢以外の何ものでもない。

環境影響評価法はその第一条で、「環境影響評価を行う主体は事業を行う事業者」と規定し、環境影響評価についての国等の責務について触れ、その上で手続その他所要の事項を定め、それによって行われた環境影響評価の結果を反映させ、その事業に係る環境の保全について適正な配慮がなされることを確保し、もって現在及び将来の国民の健康で文化的な生活の確保に資することを目的とする。と規定している。

ここからも形式的に進め、その結果環境破壊を引き起こすことを戒めている。環境の保全について適正な配慮がなされるとは、代替案の選定に当たっては最大の環境課題の解決の要請に応えることである。当然新石垣空港建設にあっては、白保のアオサンゴ群落の保全であり、何度も候補地が変転したように、その設置場所こそ最大課題である。もし、事業者がわざと枝葉末節の問題の代替案で済ませ、その結果重大な環境破壊が起きれば、日本の環境影響評価法は死んでも同然である。ましてや、代替案すら提示せず事業を進行させれば論外である。

その場合、基本的事項の違反を黙認した環境部局の長である沖縄県知事と環境省の責任が厳しく問われることになる。

このまま事業を進めれば、三たび世界から批判を浴びる事は必然である。観光立国が北半球最大の白保のアオサンゴの破壊に手を貸し、観光立国が貴重な観光資源の破壊者となる。

どうか沖縄県や環境省の担当者が、不作為の罪を犯さないことを希望する。

宇井純先生の沖縄での研究の成果が、一冊の本になりました。

「沖縄型・回分式酸化溝のすすめ」

(自然循環型の畜舎排水処理システム)



16年間の沖縄生活を終えられて、昨年本土にお戻りになった宇井先生が、沖縄で研究されてきた家畜排泄物の処理方法についての冊子が完成しました。名付けて「沖縄型・回分式酸化溝のすすめ」。管理が簡単でコストも安い、畜産農家のための安価な排水処理システムの作り方がわかりやすく解説されています。前半は、回分式酸化溝の原理と特徴、そして作り方が説明され、後半では沖縄や日本が抱える水問題、ひいては沖縄の未来について宇井先生が熱く語られています。

畜産農家はもとより、環境問題を考える上で、一般の方にも示唆に富んだ内容となっています。畜産農家の方には無料で配布していますが、一般の方にも一冊500円で販売しています。お問合せ・お申し込みは沖縄環境ネットワーク事務局まで、お電話・ファクス・Eメール等にてご連絡下さい。

ゴミ処分場建設計画撤回、その後…

大城 順子（「南部のごみ問題を考える住民委員会」委員）

これまでの経緯…2001年5月、沖縄本島南部の玉城村当山区にある島尻清掃組合のごみ処分場に隣接する2万6千坪の用地に、南部10市町村の廃棄物を埋める施設を建設したいとして、行政側の南部広域行政組合が一方的に地域説明会を始めたことを契機に、その用地選定の不透明さや、この地域にすでに屎尿処理場や産廃処分場などのいわゆる迷惑施設が集中していたことに住民が反発、「南部地区一般廃棄物最終処分場用地変更を求める連絡協議会」を発足させ、積極的に勉強会を開催するなどして、用地の変更を広く訴えた。その結果、2002年10月9日に、玉城村長は当該地区への処分場受け入れを正式に断念した。詳細は通信20号参照。

平成14年9月に沖縄県南部の玉城村当山区の用地（迷惑施設の集中した雄樋川流域）への南部地区10市町村の一般廃棄物最終処分場建設計画が白紙撤回されてから約9ヶ月後の平成15年5月16日、新たに「南部地区廃棄物処理施設推進協議会」（南廃協）が発足した。

南廃協は南部10市町村の首長や議会議長で構成される理事会のほか、施設建設選定、地域振興、ゴミ処理研究、施設整備広域化研究のそれぞれ4つの部会を設け、各自治体の助役や担当職員、清掃組合関係者、そして前回の白紙撤回を教訓に仕切り直しとのことで、住民代表や学識経験者も委員に加えられた。しかし、住民参加と情報公開を徹底していくとしながら、各部会や理事会がいつ、どこで開かれているのか、住民代表をいつ、どのように、誰に決めたのか、これらのことは長い間住民に知られることはなかった。

その間に、施設は灰溶融炉の導入と被覆型最終処分場にすることを、環境保全に最適等の理由で、住民には公開せず決定した。

桜井国俊先生の基調講演で始まった昨年11月29日の「南部のゴミ問題を考えるシンポジウム」では、前回の計画で反対運動をした用地変更連絡協議会の事務局長・仲宗根長吉氏もパネリストの一人だったので、前回の問題点（建設予定地の選定過程の不透明さ、住民への説明責任の不十分さ、迷惑施設の集中等）が次々と出された。

前回の反対運動を助けて下さった桜井先生は基調講演で、いくつかのモデル地区の事例を紹介し、迷惑施設の

集中を避け、行政と住民とが情報の共有をすること、ルールを踏まえた合意形成の重要性を強調、大量エネルギーの消費が温暖化を促進すること、ごみになるものを作らせない・売らせない・買わない等を住民が常に心がけることの必要性、などを、わかりやすく丁寧に教えて下さった。そして、住民から地域を動かす市民への脱皮が大切であることも教えていただいた。

その後、南廃協が情報公開を徹底していないことや、行政に都合の良い人を住民代表にしても行政主導になってしまうので公募すべきでは等の意見が市民からあがり、それを受けて南廃協では、新たに住民委員会の委員を公募で選ぶこととなった。

3月9日に豊見城市から始まった住民説明会への参加は、少ない自治体では10数名のところもあり、事前告知が足りないのではとの声もあがる中、4つの自治体の説明会に参加した。玉城村での説明会では「焼却炉・灰溶融炉施設・リサイクルプラザ・ヤード」を一箇所に集中させるとの説明があったので、「人口一万人の村に何万人分ものごみを持ってこられてはたまらない」等の反発が出た。しかし南廃協側は「あなたがたもごみを出しているではないか」と言うばかりで話は平行線のままだった。この席で住民側から、部会や理事会の一般傍聴を要請し、これは可能となった。

4月1日に創刊された南廃協の広報誌「地域（しま）だより」には、「効率的・機能的な運用の面から、南部の三清掃組合（糸満・東部・島尻）のいずれかに集中して併設することも検討してほしい」との要望が記されていた。要するにコストを安く抑えようということである。

私は佐敷町での説明会で、前回の計画が白紙撤回になったときの課題であった「可能な限り公平な負担」はいったいどうなるのかと伺いました。すると、「既存の焼却炉のあるどこの住民も受け入れるはずがないだろう。受け入れると思うのか」「既存の焼却炉への併設は無理」という、感情的な返答をもらった。おそらく、今後このような対応の仕方で物事が進んでいくのだろう。

私は、用地変更連絡協議会のこれまでの運動が活かされてほしいとの願いから、住民委員会の委員に応募し、委員となった。これからも「Never Give up」の精神で頑張りたいと思う。ご支援よろしくお願い申し上げます。

アメリカが去り、ニホンがやってくる

仲西 美佐子（沖縄環境ネットワーク世話人・恩納村在住）

1995 年に返還された在沖米軍恩納通信所跡の下水処理槽から PCB（ポリ塩化ビフェニール）やカドミウム・水銀などの有害物質を含む汚泥が発見された。その後、那覇防衛施設局に引き継がれた米軍跡地（恩納分屯基地）からも PCB を含む汚泥が発見された。恩納村には 322 トンもの汚泥が保管されている。

国は 2001 年のポリ塩化ビフェニール廃棄物の適正な処理に関する特別措置法を制定し、全国を数ブロックに分けて環境事業団が PCB の拠点的な広域処理施設を整備して処理事業を行なうことにしている。中国・四国・九州・沖縄の処理のために、九州事業として北九州市で着工され、そろそろ稼働の段階にきている。

そのような広域化処理計画の進む中、防衛施設局は恩納村で恩納村だけの PCB を処理するための施設を造ろうとしている。そして村長は、安全の確認が取れたら地元処理を進めるというニュアンスの発言をしている。PCB は移動できないから危険な物をいつまでも危険な状態にしたいと言う。これまでここに住む恩納村民は危険でなかったが、大学院大学ができるのでここに来る外来者には危険だということなのか。

議会は 3 回に渡って PCB の村外撤去を決議している。しかし、恩納村は去年の 11 月 20 日に防衛施設局から来たお誘いに、事前学習なしで、12 月 2 日には関係者たちが北海道に処理施設の視察研修に参加している。このあわただしさは、12 月末に処理プラントが解体されてしまうからだというのだが、実際はそういうことはなく、要は考える暇を与えないために視察を急がせたということのようだ。

今年 5 月になって村主催で施設局による地域説明会があった。前年の北海道行きは、超臨界水酸化分解法による PCB の処理技術の視察研修が目的だった。最新の技術である超臨界水酸化分解法で PCB を分解し、煙を出さず無害な二酸化炭素・水及び処理灰にする環境にやさしい方法だとの説明があり、恩納村の汚泥の超臨界水酸化分解法による実証試験の結果が公表された。しかしそこには、どこで試験を行い、どこで分析したのかという記載がなかった。この点を問いただすと、「オルガノ株式会社」で試験し、「オルガノ株式会社総合研究所分析センター」で分析したとのこと。通常、客観性を保つためにも、試験と分析とは別のところに依頼するのが一般的だと思うのだが、この結果は信用できるのか？ ちなみに試料はたった 2 リットル。これで実証試験といえるのだろうか？

北九州市での PCB 処理は油状の純粋なもので、汚泥に含まれる PCB は現状では処理できない。今後、北九州で第二期工事が行われても、汚泥を処理できるかは未定。だから恩納村で独自に処理したいというのが防衛施設局の意向だ。最新技術の超臨界水酸化分解法での汚泥の処理はどこでもやっていない。北海道も油の処理で汚泥処理ではない。最新に付きまとうリスクを住民は誰も負いたくはない。

PCB の放置された恩納通信所跡地は軍転特措法での返還第一号だっただけに、いろいろな問題点が出た。もっと安全性が確立してから考えたほうがいいのではないか。PCB が置くだけで危険なら、活断層の多い所の放射性廃棄物の保管は何時まで続くのだろうか。それとも安全なのだろうか。

沖縄からコスタリカへ 平和憲法とエコツーリズムの旅

ツアー日誌 (2)

2 日目は午前 4 時に目が覚めた。明らかに時差の影響である。日本と 15 時間違うので、昼と夜が完全に逆転する。小一時間気功法を行い体調をととのえる。全身が温くなり、朝食の 6 時まで再びコンピュータに向かう。

ホテルの一階に降りて、付属レストランでバイキング形式の朝食をとる。今日もハードスケジュールなのでしっかり食事を食べた。遅く食事を始めたので、既に果物類は無くなっていた。沖縄大学の緒方 修教授から昨日の夜に外出の誘いがあり、今日の夜にも一緒に出かける約束をしていたが、朝食時に緒方さんが「ご夫婦での旅行と思わないで声を掛けた。一人旅で羽を伸ばしているのなら、夜のコスタリカも良いのではと思ったもので」と言われた。「彼女も外出を楽しみにしていますので、今夜お願いします」と言う事で改めて約束した。緒方さんはマスコミ学が専門で、大学に勤めるまでは文化放送にいたそうで、海外旅行（取材）の経験が豊富である。

教育が国を守る

朝のラッシュに掛かる前に、サンホセを抜けようと 7 時 30 分に出発した。コスタリカ教育庁のセシリアさんが同乗して、エロゲオにある国連平和大学に向かう。車中セシリアさんがコスタリカの教育について説明を行う。

400 万人のコスタリカ国民に対して 100 万人といわれる難民が、隣国ニカラグアから着の身着のまま入国している。彼らに職を与えるとともに、子供たちの教育を受ける権利を守らねばならない。小国コスタリカにとっては非常に大きな負担である。それでも憲法で GDP（国民総生産）の 6% 以上を教育費とすると定め、識字率が 93%（2002 年）で中南米最高を維持している。失業率が 6.4%（2002 年）で、平均寿命も男性 75.6 歳、女性 79.9 歳、平均で 77.75 歳（2002 年）という数字も、多くの難民流入の状況から考えれば立派な数字である。軍隊を廃止し「国を守るのは軍隊ではなく教育である」という、教育を重視する政策によって実現している。

しかし、そのようなコスタリカにも、世界の憲兵を自認するアメリカの政策の影響がある。アメリカ大陸警察学校建設の動きがあり、セシリアさんはこれがコスタリカに対するアメリカの影響力の増大に繋がると反対しているそうである。

ガイドの下村さんと高橋愛子さんから補足説明を受けながら国連大学を目指した。メンバーからはいろんな

質問が飛び、それに丁寧に答える二人が、コスタリカをこよなく愛していることがよく判る。

意外に牧草地が多い

街中を走るタクシーは全て赤い色で、小型車である。パトカーは白いバンが多い。サンターナ（太陽の盆地という意味）という町を通り、大学のあるシュガーコロニーに向かう。途中コスタリカ最大のサバナ公園を通ると、見事な藤色の花を咲かせるジャカランダと思われる多くの樹木があった。

徐々に家並みもまばらになり、農村風景に変わり始める。牧柵やサイロが見え、放牧されている牛もいる。背中にこぶのあるインド原産の白い牛や、白黒模様の乳牛ホルスタインもいる。茶色いジャージー種の子牛もいるが、どの種類の牛も北海道に比べると、配合飼料で育てない分痩せて見える。牛舎の設備から見て、ほとんどが放牧による育成と思える。牛を自然に近い形で育てているので、高橋さんの説明でも健康的な牛肉で、人工的に脂肪分を乗せない分、安くてヘルシーである。平地は牧草地が広がり、飼い犬が多く羊も見える。



通訳について高橋愛子さん（写真左）は 28 歳の大学生で、父親が大阪の河内の出身でコスタリカの女性と結婚し、高橋さんはコスタリカの日本人学校に就学したそうである。流暢な日本語に加えて、若いのに多方面の多くの知識をもっている。大学の専攻は畜産だそうだ。

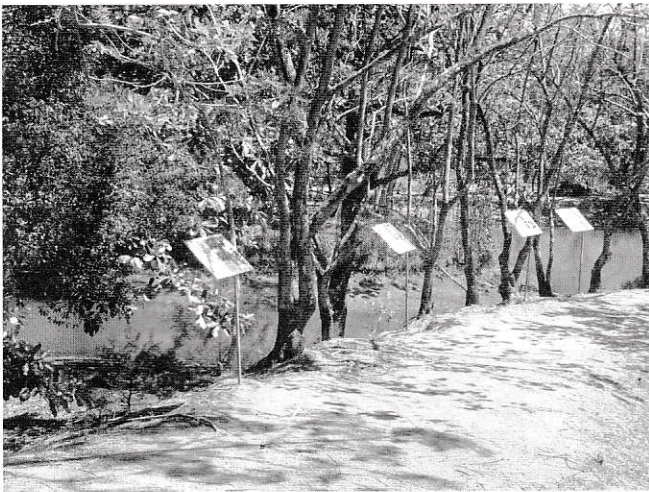
下村さんも、英語とスペイン語を話し、コスタリカの歴史や自然、民俗等に明るく、インテリジェンスにあふれている。才能と誠実さにあふれる通訳を 2 人得て安心

である。特に2泊3日のモンテベルデ〜ドスチレスのエコツアーは、細い山道を移動するので、2班に別れ2台の小型バスを利用し、それぞれに通訳が必要になる。

自然環境豊かな国連大学

7時半に出発したバスは、8時45分に国連大学に到着した。サンホセから南西に30キロ離れた自然保護地区に開設されている。広々と開けた開放的な雰囲気、広い公園の中に別荘風の建物が建っている。ここで学べる生徒は幸せである。

まずは、敷地の案内をしていただいて、それから交流を行う。広大な敷地に、環境教育に配慮したコスタリカの動植物の表示版が立てられている。



驚いたことに、国連大学の記念モニュメントには笹川良一の名前が見える。第2次世界大戦の戦争責任を問われ収監されるも、競艇の利権を得て収益の一部を自己の笹川財団の財源にし、BG財団（後の日本財団）として世界に多くの施設を建設している。コスタリカでも記念碑の建設資金を拠出している。外国でこのようなモニュメントを見るのは不愉快であるが、コスタリカの人はそのようなことを知る由も無い。碑文には「コスタリカの母親は幸福である。自分の息子を軍隊に入れなくて良いから」とある。日本で一回でも反戦平和運動をしたのかと言いたくなる。

見学が終わり、国連平和大学の説明を受ける。できれば国連大学の学生と交流できればと検討されたが、規定の講義があり、断念した。

平和を通しての問題解決

交流会に入り、まず桜井さんがパワーポイントを使い、沖縄の実情を15分にまとめ、スペイン語で説明した。桜井さんのプレゼンはビジュアルで、テンポがよい。桜

井さんは、来月からは沖縄大学の学長に決まっており、この機会をはずしては、数年間はコスタリカツアーの責任者は忙しくて出来なくなる。教育庁のセシリアさんは桜井さんの教え子で、他にも桜井さんの知り合いの方々に、ツアーのコーディネイトをしていただいた。桜井さんなくしては、今回のツアーは成立しなかった。

次いで国連大学の説明に入った。環境プログラムの責任者のベッティさんと、講師のエシケーリアさんが説明にあたり、セシリアさんが教育庁としての補足を行う。

基本的な理念は、世界中の国々が平和を通して問題を解決していく方法を確立することである。スリランカを始めとする、現在も紛争を抱えている地域を対象とした、多くのプログラムを進めている。主にはアジア・アフリカ・ラテンアメリカの地域を扱っている。大学院には、5つのプログラムがあり、平等・平和、平和教育、環境保存、人権、個人の尊重等を研究している。研究成果は、各国に教科書として利用できるように、インターネットでも配信されている。

平和教育に反映させるため、アースチャーター制度を設けている。世界各地から多様な学生を集め、各地の文化・実情に応じた教育を提供し、提携を結んだ各国の大学に配信している。また、市民社会やビジネス社会にも研究成果を反映させるべく、地域社会のリーダーや中間管理職への教育課程を提供している。個人の尊厳と他者への思いやりをテーマに、2005年度からはコスタリカの教育への取入れが決まっている。

重要なことは、平和教育とは、単に戦争が無い状態を維持するのではなく、調和の取れた状態を、積極的に行動し作り出すことが求められる。それゆえ、分離した教科として取り扱うのではなく、数学・体育・理科の中に統合的に平和を意識し、実践的に扱っている。

同じく環境教育も、人と自然のハーモニーとして平和の概念に入ってくる。アースチャーター制度で、社会人に対して1週間の短期プログラムや、地域への出前講座も行っている。琉球には自然とのハーモニーを行事や祭祀として形式化しているが、コスタリカではどうかとのメンバーの問いに、ベッティさんは特別な行事としてではなく、毎日の行動で表していると答えた。また、9月1日から独立記念日の15日までの半月間はパレードや平和デモクラシー演劇が毎年行われ、平和を祝っていると答えた。

また、具体的な環境保全策として、NGOとの協力や、地域リーダーの養成、なによりも自分の住んでいる地域を綺麗に維持することを子供のときから教育で重視していると答えた。沖縄では、道路は行政によって清掃され、

結果として綺麗に保たれている。一方コスタリカでは地域で清掃を行っている。我々から見て、街中のごみ処理は必ずしも綺麗ではないが、そのシステムの違いを考慮する必要がある。孤島の経済大国日本と、近隣諸国から難民が大量に流入する発展途上国のコスタリカの周辺環境の違いがある。

このような国連大学をコスタリカに設置したのも、アメリカの影響を制限し、また隣国から武力によって攻められにくい環境を作る意味がある。

沖縄では、日本の米軍基地の75%が集中され、見返りに多額の政府支出が投入されている。学生たちの身边でも、基地関連の職場で就業し、あるいは基地があるが故に収入を得ている例も多い。それゆえ基地が無くなる影響をどのようにケアするのか、という問題に対して、若いコスタリアの女性は、軍隊が有るというそのことが恐ろしい、と感想を述べた。生まれて以来軍隊と共存を余儀なくされた沖縄の若者の感性と、一度も軍隊をその人生で体感していないコスタリカの若者の感性の違いが興味深い。人を理解するのではなく、殺すことを訓練し続けている集団が側にいることは、本来恐怖のはずが、我々は既に麻痺している。

美人は無料？

交流会が終了し、昼食を食堂で取る。ビュッフェ方式で国連大学の学生と一緒にいる。コーヒーやジュースも自由で、果物も多い。小豆に似た茶色の豆はよく料理に出てくる。ライスは豆と炒めた料理が良く出される。陸稲で、パサパサしているので食感はうるち米とは異なる。魚料理も多いので、食事はスペインの影響が強いであろう。

ミネラルウォーターとアイスクリームは別料金だが、担当の食堂職員がツアーのおばさま方に、あなたは美しいから無料でよいと言ったとかで、多くのメンバーがミネラルウォーターのボトルをもらって来た。美しいと言ったのではなく、怖いと言ったのにスペイン語が分からなかったのでは、と揶揄されていた。

大学を後にする時、しっかりとアイスクリーム代金とミネラルウォーター代金は請求された。

美味しいコーヒー

次いでコスタリカ最大のブリットコーヒー農場に観光に行った。途中でエレビアと言う花の町を通った。そこから世界に花や観葉植物を輸出している。日本にもクロトン等たくさん輸出しているそうである。幸福の木は、ヒット商品としてたくさんの外貨を稼いだそうである。

照屋さんが、幸福の木で幸福になれるのかしらというので、売ったほうは金儲けが出来、幸福じゃないの、と答えた。

先ほどの国連平和大学で飲んだココナツミルクのような飲み物は、パルミットと言う椰子の茎から採った樹液だそうである。ホテルの向かいの食堂でも出たので、ポピュラーな飲み物であろう。

コーヒーはエチオピア原産といわれ、コスタリカで栽培されているのはアラビカ種である。高度1200メートルから1500メートルが豆の皮が硬くなり、高級なコーヒーができる。ここでは、一粒ずつ手作業で選別して焙煎しているので、中米でも高級種として扱われている。コスタリカでは、どこに行ってもコーヒーがおいしいので、私も普段よりつい多く飲んでいる。

コーヒー畑には5メートル間隔でポロの木が植えられている。マメ科のポロは、根瘤菌の働きで、空気中の窒素を固定する働きがあり、畑に養分をもたらす。

この農園は、入園案内から演出されていて、楽しめる。その中でもしっかりとコーヒーのリサイクルをアピールしていた。コーヒーの歴史を演劇風に仕立て、観客を巻き込んで笑いを取る演出はさすがである。



そのまま直売所に流れて、御土産のコーヒーを購入する。340g入りで20袋55ドルである。1袋300円ほどで安く、ほとんどのメンバーが持てるだけ買った。私も20袋は沖縄まで郵送してもらい、別に8袋買った。

買い物が終わりバスに向う時、学生の伊敷美乃さんが、私にご夫婦ですか、奥さんはかわいい方ですね、と話しかけてきた。本人の前で言ってくると非常に喜ぶのだが、惜しかった。31人のツアーで、夫婦は桜井さんと私たちだけで、桜井さんは新婚1年目で、こちらは結婚30数年と大違いである。

居酒屋で交流

その夜はホテルに戻り、しばらく休んでから食事に出かけた。緒方さんは既におばさま方と出かけ、私はインターネットで、沖縄に作業の確認をしてから後を追った。ホテルから2ブロックほど離れた辺りをキョロキョロしながら店を覗くと、店内にいたコスタリカ人の客が、ヤポネ、ヤポネと指差し招いてくれた。入ってみると奥に5名のメンバーが食事をしていて、合流できた。

コスタリカの客が一人で隣にいたので、相席をお願いした。ビール2本と夫婦で料理2つを頼んだ。早速スペイン語でいろいろと話しかけてくる。私の目が細いのが可笑しいらしく、こちらの顔を見ては両手の人差し指で自分の両目を示して笑っている。テーブルの上の物をスペイン語でしゃべっては、我々の発音をチェックする。氷がイエロということぐらいしか覚えていないが、人懐っこく陽気である。頭も禿げ、腹も出ているが、54歳の同じ年で驚いた。私も54歳だと言うと、半信半疑である。ピノチオと繰り返すので人形のピノキオに擬えて、嘘つき扱いされたようだ。横を通り過ぎる客が、ほとんど彼に声を掛けて行く。この店の常連で、人気者のようだ。日本語で分かるのはトヨタ・日産・ソニー・日立・松下で企業ばかりである。

出てきた料理は非常に大きく、1つの料理を2人で食べても十分な程である。店内はサッカー一色で、壁には多くの地元チームの集合写真が飾られ、天井からはユニホームが垂れ下がっている。店内テレビもサッカー中継を放映しており、さすがにワールドカップの強豪国である。しかし、私の相席のバラオナさんはサッカーが嫌いだという。1時間余りおしゃべりをして、ビール2本と2つの料理で勘定は6ドルであった。安い。

ホテルへの帰り道に同じツアーの学生集団と出会った。先ほど、2名の学生にドルと円を交換し、早速外出となったようである。私たちの子供の年齢で、修学旅行のノリで、元気一杯である。

エコツアーに出発

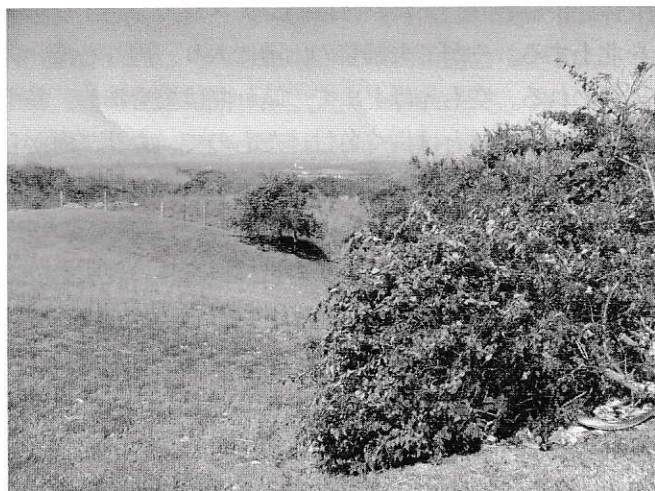
サンホセの3日目は2泊3日のエコツアーの出発日である。例によって4時に起床しインターネットを確認する。エコツアーの間は山岳地方なのでインターネットができない可能性がある。ホテルの食堂で朝食をする。今日は果物がいっぱい残っている。コーヒーと果物は本当においしい。

ツアーの間、不要な荷物をホテルで預かってくれるので、大きなボストンバックを預ける。ホテルの裏の駐車場から午前7時に出発である。これからの2泊3日は山

道なので、2台の中型バスでツアーをすることになる。私は社会人バスの最後尾に伊波義安先生と乗った。横は山口洋子さんと兼城淳子さんである。出発してすぐに下村さんの携帯に朗報が入った。行方不明になっていた寺田麗子さんの荷物が戻った様で、急遽空港に受け取りに行くことになった。エコツアーの取材は、これで可能になった。空港は開けた場所にあるので、寺田さんが荷物を取りに行っている間、車から降りて風に吹かれると爽やかな気分になる。寺田さんは荷物を半ば諦めていたので、満面の笑みでバスに引き返してきた。

剥ぎ取られた草木

モンテベルデに向けて4時間の道のりである。平地から徐々に山間に入っていく。驚いたことに、平地も山間もほとんど樹木が剥ぎ取られた状態である。所どころに申し訳程度の木が残っている。どうやら牧草地のようである。牧柵に鉄条網が見える。



伊波先生が、「人間はここまで罪深いものか、滅びなければいけない」と呟いた。元は深い緑に覆われていた様子が見える、立派な木が孤立して残されている。ガイドは下村さんと高橋さんが交互に2台のバスを交代で受け持っている。

牧柵に使われているのは裸のインディアンと呼ばれている立ち木で、生きた木を使用しているので腐らないしエコロジカルであると高橋さんが説明している。しかしここにあるのは全滅した生態系だ。エコロジーの対極だろう。

桜井さんがメンバーの困惑を読み取って、1950年台のアメリカのハンバーガーコネクションを説明した。ファーストフード用の安い牛肉を中央アメリカで獲得するため、森林を大規模に伐採して牧草地にし、牛を放牧し、できた牛肉をアメリカに輸入してハンバーガーの材料にした歴史がある。その過程で広いコスタリカの森林が裸

にされたそうである。

やがてパンアメリカンハイウエー沿いのレストランに停車し、休憩を取った。子供を抱いた母親が物乞いに來たので面食らった。彼女たちは店には入らずに外を散策しているメンバーに、次々と恵みを乞うていた。対応が分からず、落ち着かないので店に入った。

400万人の国民に100万人の難民が居る状況は、多くの場所で体験する。着の身着のままに流れ着いて、日々の糧を乞う。コスタリカの家は、全て金柵で囲われている。中米一と言われる治安も、保身用に銃が簡単に手に入る現実と背中合わせである。

レストランの道を挟んで反対側は放牧地で、インド原産のこぶのある牛と乳牛のホルスタインが放牧されていた。スックと伸びた草木がやさしい影を作っている。日光は強いが、木陰は涼しくフッと気が遠のく。

熱帯雲霧林の中に

休憩が終わり、またバスはパンアメリカンハイウエーを北上する。やがて未舗装の山道に入り、周りも深い緑に覆われる。空も先ほどまでの晴れ間は姿を消し、霧雨になる。雲霧林とは良く名付けたもので、カリブ海からの湿った風が山脈に吹き上げられ、常時雲を纏う状態になる。

ガイドから、モンテベルデの自然保護林の説明を受ける。1951年にアメリカのアラバマ州のクエーカー教徒11家族41人が徴兵を拒否し、軍隊を廃止したコスタリカに移住した。牧畜を始め土地を開墾したが、特異な雲霧林の自然に気づき、その保護策を講じたのが始まりである。以来、1970年の黄金の蛙の発見により、世界的な貴重種の生息地として、国際的な注目を集めている。平和憲法に惹かれて移民してきた者により、エコツアーの契機ができた。この国を特徴づける両者は、意外な関連があった。

クエーカー教徒の作ったチーズ工場の脇を通り、どんどん山道を登って行く。バスの横を杖をついて歩いている人物が、開拓者のクエーカー教徒の一人だと説明を受けた。多くのロッジがあり、近年のエコツアーの高まりを感じさせる。

ハミングバード（ハチドリ）の不思議

昼食予定の食堂に着いたが、時間が早くて未だ準備ができていないようだ。ロッジにチェックインするにも時間が早いので、先にハミングバード（ハチドリ）の見学をする。

食堂よりもさらに山に分け入り、自然保護区の入り口の左側を少し登った所にある民芸館にハチドリが集まる

場所がある。砂糖水の入った容器に、いろんなハチドリが交互に訪れる。写真に撮るのは技術と運が必要である。10枚シャッターを押して、満足できる写真は1枚の割合である。とにかく動きが早い。一秒間に30回羽ばたき、空中に静止できるし、肩の関節が柔らかく、左右の翼を逆方向に回転できるので、立ち泳ぎ状態でバックに進むこともできる。色鮮やかでいろんな大きさや色彩が楽しめる。最小は5グラムの小ささで、心拍数を一分間で千回にも上げら、3年ほどの寿命がある。ここではデジタルカメラの有難さを感じた。失敗した写真を削除しては、また撮影する。その繰り返しである。

30分ほど観察して、バスに戻り、食堂へと向かった。昼食に2種類のピザを取り、霧雨の中を再び自然保護区の入りに引き返した。



森は光の奪い合い

モンテベルデ自然保護区は、民間のナショナルトラストの管理で、運営は入場料と寄付金で賄われている。環境保護のため、ツアー客の歩く道（トレイルという）は決められている。現地のガイドに案内されて、つり橋を渡るスカイウォークを体験する。1時間半の行程で雨が休みなく降り続く。木々の表面をコケ類がビッシリ覆い、緑の樹氷の風情である。

足元は滑りやすいので、大きな丸太を輪切りにした足場に、メッシュが貼り付けてあり、滑らないように工夫されている。

背丈の高い木が多く、日光を得るため植物もいろんな工夫を凝らしている。鳥に食べられ、糞と共に樹上に種が付き、そこで成長する。蘭やブロメリア（アナス科）が、大きな樹木に数多く着生している。つる植物も多く、気根が樹上から数多く降りてくる。地面に到達すると、そこから養分を吸収し始め、急速に太くなる。着生した樹木の周りを、つる植物の気根が取り囲み、やがて樹木

を絞め殺してしまう。中が空洞になったガジュマルの様な奇樹は、中の樹木が朽ちた結果である。雨の中、昆虫や動物は見られないが、植物だけでも見る価値はある。

つり橋は完全な管理保全がなされ、安全であるが、足元から谷底が見えるので、大きく揺れるとスリルがある。谷底には沖縄の食わず芋とそっくりな、大きな葉っぱが見える。

ブロメリアがたくさん付いて、そこに溜まる水の重さで元の木が倒されることがある。一つのブロメリアで多いときは、1.5 リットルもの水を溜めるそうである。倒れた木の空間から、普段は入らない日光が差し込み、地上に新たな芽生えが起きる。森の窓と呼ぶ、それも自然循環であろう。一方で、ブロメリアが着生しないように、ほとんど枝分かれせず、樹皮もなく幹がつるつるの裸のインディアンと呼ばれる木もある。

傾斜地でバスは進めず

トレイル散策後、植樹に向かった。自然保護団体が確保したコーヒー園に、手塚治虫の火の鳥のモデルになったケツアールという鳥の餌になる、リトルアボガドという木の苗を植えるものである。実は、私の今回の旅の楽しみの1つが、そのケツアールを見ることである。長い美しい尾羽をなびかせて、優雅に舞う姿を是非見たいと思っている。

モンテベルデの雲霧林を抜けた所で、見事な虹が見えた。コスタリカで虹を見るのは簡単だ、というキャッチフレーズどおりである。



しばらく山道を進むが、雨でぬかるんだ道は行く手を阻み、ドンドン陽も落ちていく。このままスケジュールを消化しようとするれば、夕食は9時ごろになる。結局、植樹は明日に変更して途中で食堂に向かった。谷あいの道を登ろうとして、バスはスリップを繰り返し、立ち往生になった。後輪に重しを掛けるため、メンバーが後部

座席に移り、数度繰り返してやっと脱出できた。

食堂にたどり着いて夕食が始まった。若い学生は御代わりをして、ステーキを食べている。私のテーブルに下村さんが来て、メンバーからスケジュールの不満が出された。トレイル散策を目的に来ているのに、たったの1時間半しか時間が取れ得ないのはおかしい。移動の時間が多くて、それぞれの内容を深められないというものである。特に植樹については、アメリカのハンバーガーコネクションによって裸にされた山野を、なぜ沖縄の我々が尻拭いするのかという反発も出た。

しかし、団体ツアーで日程と予算が決められている以上、いまさら変更は出来ず、下村さんも困惑していた。早朝から夜まで、通訳兼ガイドを務めている彼に、全員が感謝していること。その上で、コスタリカまで来ているので、より有効に過ごしたい気持ちがあることを伝えた。

宿泊はモンテベルデの入り口にあるロッジで、社会人メンバーの部屋は、受付からつり橋を渡ったところにある。一日移動し続け、最後まで揺れている日である。

部屋からインターネットを頼んだが、設備がないといわれ、国際電話で沖縄と連絡を取った。モーニングコールを頼んだが、翌朝4時に目が覚め、記録をつけている。食事の時間になったが、モーニングコールはない。サンホセでもないことがあった。もともと、いつも4時に起きているので、実害はないが。

チェックアウトの時、昨夜の国際電話の精算をした。バスに乗って出発を待っていると受付に呼ばれた。団体ツアーで支払い済みの宿泊費も、電話代と一緒にカード支払いをしたことになり、2重払いが起きたそうである。20ドルぐらいの金額なので、全員を待たせるほうが心苦しかった。(次号に続く)

(文・写真／内海正三)

総会資料

2003 年度活動報告

4 月 1 日	事務局移転
4 月 8 日	継続事業の「基地と環境問題プロジェクト」にトヨタ財団からの助成決定
4 月 10 日	通信 21 号発行
4 月 15 日	「基地と環境問題プロジェクト」に高木仁三郎市民科学基金からの助成決定
5 月 18 日～24 日	ノルウエーの NGO「地球の友」メンバーの沖縄視察をサポート
6 月 2 日	大阪から専門学校生（山下久美子さん）がインターンとして研修
6 月 7 日	米軍基地の環境問題解決に向けての市民参加によるしくみづくり 第一回勉強会開催（具志川市中央公民館）
6 月 8 日	高木基金の報告会に出席（砂川）
6 月 15 日	通信 22 号発行
6 月 28 日	ネットワーク総会
7 月 2 日	韓国・京畿道の議政府市の「ローカル・アジェンダ 21」のメンバーとの交流会
7 月 4 日	新世話人会。新しい世話人 4 名参加
8 月 5 日	「日米学生会議イン沖縄」フィールドトリップをコーディネート
8 月 18 日～21 日	韓国の議政府市にて講演（砂川）
8 月 20 日	竜谷ボランティア・NPO 活動センターの山原フィールドワークをコーディネート
9 月 17 日～18 日	甲南大学大久保ゼミの山原フィールドワークをコーディネート
9 月 25 日	通信 23 号発行
10 月 9 日	アジアフェロシッププログラムに参加（砂川）
10 月 18 日	キャンプコートニー鉛問題の第二回勉強会
10 月 19 日	東京で開催された鉛弾問題のシンポジウムに出席（砂川）
11 月 10 日～13 日	「PDSAP（アジア・太平洋の平和・軍縮共生のための国際会議）IN 沖縄 2003」 にて発表（砂川）
11 月 29 日	ウエルサンピア沖縄で行われる南部のゴミ問題を考える公開シンポジウムの コーディネート（桜井）
11 月 30 日～12 月 3 日	フィリピンのクラークとスービック基地跡を視察（砂川）
12 月 6 日	恩納村コミュニティセンターにて講演（桜井）

2004 年

1 月 10 日	通信 24 号発行
1 月 16 日～21 日	インド・ムンバイでの「世界市民社会フォーラム」に参加（砂川）
1 月 15 日	畜産排水浄化システムについてのマニュアル本「沖縄型・回分式酸化溝のすすめ」 を発行
1 月 17 日	沖縄県大里村にて「沖縄型・回分式酸化溝のすすめ」発行記念の講演会及び勉強 会開催
1 月 17 日	「沖縄型・回分式酸化溝のすすめ」に関する特許申請
1 月 30 日	第一回編集企画委員会開催
2 月 24 日～27 日	米国ジュゴン訴訟のピーター・ガルビンとモロ弁護士来沖 交流会を持つ
3 月 16 日～25 日	コスタリカツアーに世話人および会員数名参加
3 月 28 日～30 日	立命館大学大島ゼミの山原フィールドワークをコーディネート

総会資料

2003 年度一般会計収支報告（暫定）

収 入

前期繰越	681,279
年会費	1,772,700（翌期分前受金を含む）
寄付金	88,219
書籍・資料売上	121,570
雑収入	63,000（注 1）
収入合計	2,726,768

支 出

人件費	1,260,000（注 2）
通信費	326,260（注 3）
消耗品費	101,867
印刷費	217,240（注 4）
振込手数料	22,050

その他	
事務所契約関連経費	491,499（注 5）

事務所家賃（共益費含む）	252000
電気代	15912
水道代	5664
電話代	119637

机代	10000
プリンター購入費	26951
ファクス付き留守電代	5250

沖大祭広告費	3000
満月まつり協賛金	3000
回分式マニュアル本発刊記念勉強会会場費	6000
パソコン修理費	4725
ウィルス対策ソフト更新費	3150
プロバイダー契約料	42210（注 6）

支出合計	2,424,916
------	-----------

収支	+301,852
----	----------

注 1：フィールドワークコーディネート（4 回）謝礼合計

注 2：事務局員人件費（105,000×12 ヶ月）

注 3：通信発送費および冊子郵送料、振替用紙加入者印刷費もここに含む

注 4：ニュースレター印刷費 196,000、ネットワークリーフレットおよび会員募集 B5 チラシ印刷費 18000
および印刷実費

注 5：家賃・水道代・電気代は「けーし風」事務局と折半

電話代は基本料金系統は折半、通話料については 90%負担

注 6：インターネット及びメール、ホームページ用のプロバイダーへの契約料金

※この収支表は監査人による監査を受ける前のものですので、暫定収支とさせていただきます。

2004 年度事業計画案

● 前年度よりの継続事業

- 1 畜産排水処理技術（回分式活性汚泥法）の普及のための活動（マニュアル本の配布および全国への PR）
- 2 環境影響評価（アセス）法の研究とアセス学会開催への協力（新石垣／辺野古）
- 3 内外環境 NGO との交流
- 4 一般市民に開かれた講演会や公開勉強会の開催
- 5 在沖米軍基地の環境問題の調査とその対策（2002 年 1 月よりプロジェクト実施中）
- 6 ゴミ問題とリサイクルに関する市民運動への支援および連携
- 7 議員・行政との意見交換会、および環境政策策定における市民参画のコーディネート（各種委員会への派遣等）

○2004 年度新規事業および今後力点を入れる事業

- 1 エコツアーリズム研究
（先進地コスタリカ訪問の成果を踏まえ、再度訪問に向けての学習と準備）
- 2 収益事業の検討（例：エコツアー、環境ガイド育成講座等）

■運営面での課題

- 1 ネットワーク通信の双方向化（会員の意見の反映）
- 2 インターネット等を使つての機動的な問題への対処、具体的にはホームページの充実
- 3 行政に対して説得力を持つための、更なる力量と能力の獲得
- 4 環境教育のための、他団体・機関と協力しての教材作り、および学校への情報普及
- 5 地域性を考慮した活動・支援・連携の強化
- 6 会員数を増やして足場を固める（会員目標 1000 名）。そのための具体的実践活動
- 7 助成事業の強化

総会資料

2004 年度沖縄環境ネットワーク予算案

(一般会計)

収入

前年度繰越金	307,852	
年会費	2,400,000	(2003 年度実績から算定)
雑収入	100,000	(2003 年度実績から算定)
小計	2,807,852	

支出

事務局費	2,460,000	
人件費	1,260,000	(事務局員 105,000×12 ヶ月)
事務局関連経費	500,000	(2003 年度実績から算定)
通信費	400,000	(2003 年度実績から算定)
印刷費	200,000	(2003 年度実績から算定)
消耗品費	100,000	(2003 年度実績から算定)
事業費	100,000	
調査・研究費	50,000	(主に交通費等)
研修・派遣費	50,000	(出張費用等)
予備費	100,000	
小計	2,660,000	
収支見込	+147,852	



環境情報おきなわ(2004 年7月～2003 年8月)

◆沖縄大学地域研究所創立 15 周年記念

連続シンポジウム

【第8回】

テーマ：「沖縄から見えてくること

～近代＜アイデンティティ・国家＞と学問」

発言者：新崎盛暉（沖縄大学名誉教授・沖縄近現代史）

花崎皋平（哲学）

鹿野政直（日本近現代思想史）

屋嘉比収（沖縄大学・沖縄近現代思想史）

日時：7月17日（土）13：00～

場所：沖縄大学 3号館 101 教室

【問合先】：沖縄大学地域研究所

TEL 098-832-5599

◆宮城晴子画集

名護市の東海岸の嘉陽で豊かな沖縄の自然と人情の中で暮らす画家の宮城晴子さんが、辺野古の海の美しさを画集にしました。いつまでも大事にしたい自然を、その素朴な筆致で鮮やかな陰影の中に再現しています。

画集を見た山口洋子さんが、手軽な絵葉書にして是非多くの人に見てもらいたいと思い立ち、併せて自然保護の運動基金として宮城さんの了解のもと、沖縄の美シリーズ①宮城晴子作品集海の詩②宮城晴子作品集ふるさとの詩として出版致しました。是非御購入下さい。

◎ 宮城晴子画集「海の詩」（3500 円＋税）

問合せ／名護市嘉陽 28 番地 宮城晴子

◎ 宮城晴子作品集 「海の詩」（500 円）

「ふるさとの詩」（500 円）

問合せ／宜野湾市宜野湾 3-11-26

電話（098）893-0175 山口洋子

◆新編「消えゆく沖縄の山・海・川」

1996 年に発刊され好評を博した「消えゆく沖縄の山・海・川」の新編がこのほど出版されました。前回からの公害・環境問題年表も補足されており、今の状況が分かりやすく整理されています。定価 1500 円。

沖縄環境ネットワーク事務局からも郵送します。

【問合先】：沖縄学版

TEL 098-854-1620

【書籍販売】 郵送します

◎『沖縄の環境と平和』 価格 1,000 円

◎『低周波音公害調査』報告書 1 部 500 円

◎『沖縄から世界へ』 価格 1,000 円

事務局（098-832-8484）までお問合せ下さい

◆沖縄環境ネットワーク世話人会 参加自由です！

日 時：不定（お問合せ下さい）

場 所：沖縄環境ネットワーク事務所

年会費：個人会員：3,000 円 学生会員：1,500 円

家族会員：3,000 円 団体会員：10,000 円

特別賛助会員：100,000 円

郵便振込先：（口座番号）02010-9-20132

（加入者名）沖縄環境ネットワーク



◇今年度総会のお知らせ◇

2004 年度沖縄環境ネットワーク総会を 6 月 26 日（土）に沖縄大学本館 4 階の大会議室にて開催いたします。総会后、参加者によるコスタリカ報告会もあります。ぜひご参加下さい（通信に同封のご案内文をご参照下さい）。



■編集後記■

二ヶ月続けて通信を発行することになりました。元はと言えば、コスタリカ特集を組むために前号の発行を遅らせたのが理由ですが、さすがに連続発行はくたびれました。

辺野古の代替基地問題や日米地位協定問題などに隠れていますが、実は地元で大問題となっているのが、本島中部にある金武町の「キャンプ・ハンセン」に造られようとしている都市型訓練施設です。このような実質的な基地の「新設」がごく当たり前に行われる現状を、多くの人に知ってほしいと思います。（哲）

沖縄環境ネットワーク通信・第 26 号

2004 年 6 月 15 日発行

発 行 〒902-0075 那覇市国場 512 番地

ワタリアパート 106 号

沖縄環境ネットワーク

TEL/FAX 098-832-8484

E-mail/netwind@atlas.plala.or.jp

発行人 桜井 国俊 編集 酒井 哲哉

<http://homepage1.nifty.com/okikan/>